『談藪』研究

何旭（かきょく）＝著

散逸古小説『談藪』（陽玠松撰）は、劉義慶の『世説新語』の後を継ぐ中国の伝統的志人小説集であり、南北朝時代（四二〇～五八九）の文人士大夫を中心とした歴史人物の言行録、逸事逸話集である。早くから魯迅によってその真価が見出されたにもかかわらず、これまで日中両方の学界において詳細な研究が滞っていた。著者は『談藪』の逸文を『太平廣記』や『太平御覧』などの類書から輯佚し、本邦初の現代日本語への翻訳をおこない、詳細な注釈を加えた。正史の記載との照合を実証的におこなうとともに、『談藪』の撰者、創作の動機について推論し、文学的特徴などについて綜合的に考察を加えた。本書は中国古小説史の空白を埋める本格的な研究書であり、南北朝時代の歴史研究にも活用できる貴重な史料といえる。漢学界に寄与する待望の学術書。

◉A5判・上製・600ページ

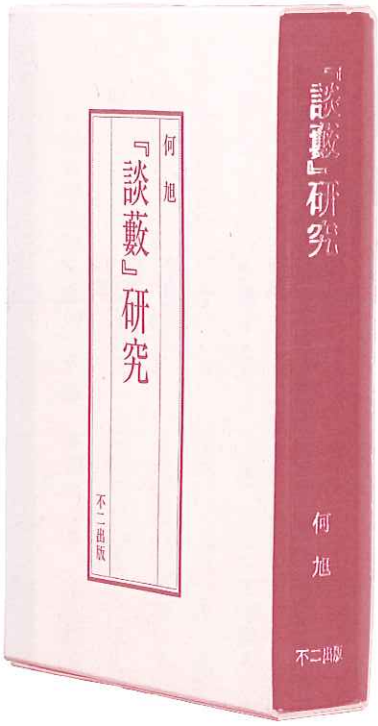
◉定価＝本体価格7,500円＋税

ISBN978-4-8350-5268-7

＊日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）による刊行

2010年2月刊行

不二出版



『談藪』研究◎目次

序　文

第一部　資料篇

第一章　散逸古小説『談藪』をめぐる諸目録、資料、諸説について
　第一節　『談藪』をめぐる諸目録と資料について
　第二節　諸説について
　　（a）書名について
　　（b）撰者について
　　（c）巻数について
第二章　『談藪』という書物の逸文について
　第一節　底本について
　第二節　逸文の題名（各条のタイトル）、人名、官名
　　（1）逸文の題名について
　　（2）逸文の人名（すなわち登場人物）について
　　（3）逸文の登場人物の官位について
　第三節　時代について
　第四節　場所について
　第五節　『談藪』の逸文内容および分類

第二部　考証篇

第一章　『談藪』の書名、撰者および巻数についての考察
　第一節　『談藪』の書名について
　　一・一　陽松玠の『八代談藪』と顔之推の『八代談藪』について
　　一・二　陽玠松の『談藪』と楊松玠（または、楊松坊）の『談藪』について
　　一・三　『談藪』と『解頤』との関係について
　第二節　『談藪』の撰者について
　　二・一　①陽玠松　②陽松玠　③楊松玠　④楊松坊について
　　二・二　陽玠松と顔之推との関係について
　　二・三　陽玠、楊玠、陽玠松は同一人物か
　第三節　『談藪』の巻数について
第二章　『談藪』の成書と散逸年代についての考察
　第一節　成書年代について
　第二節　散逸年代について

第三部　比較篇

第一章　『談藪』と正史の伝記における同一内容の記載の比較について
　第一節　『談藪』の逸文と正史の伝記における同一内容の記載のある六四条について
　　一・一　六四条の逸文の共通点
　　一・二　六四条の逸文の相違点
　　（1）「三書」との比較
　　（2）「五代史」「両史」との比較
　第二節　『談藪』の逸文の内容が正史の伝記には見当たらない四一条の逸文に登場する人物について
　　二・一　正史に伝記のある人物について
　　二・二　正史に伝記がない人物について
第二章　『談藪』の逸文と正史の伝記における同一内容の記載との関係について
　第一節　『談藪』の逸文内容と「三書」「五代史」「両史」との関係について
　　一・一　「三書」との関係
　　一・二　「五代史」との関係
　　一・三　「両史」との関係
　第二節　正史の伝記における小説の取り入れについて

第四部　総論篇

『談藪』の撰者をめぐって
『談藪』の創作動機
第一章　散逸古小説『談藪』の主題について
　第一節　『談藪』の逸文の主な内容について
　　一・一　〈諧謔〉類の逸文の例
　　一・二　〈俊辯〉類の逸文の例
　第二節　『談藪』の逸文における思想
　　二・一　儒教道教思想について
　　二・二　仏教思想について
　　二・三　儒道仏三教融合について
第二章　『談藪』の人物群像と言語的特徴について
　第一節　登場人物の人物像
　　二・一・一　四聯
　　二・一・二　疊韻について
　　二・一・三　諧聲について
　　二・二　語句について
　　二・二・一　新語
　　二・二・二　新義
　　二・二・三　熟語
　　二・三　修辞について
　　二・三・一　対偶
　　二・三・二　誇飾
　　二・三・三　擬人
　　二・三・四　用典
第三章　『談藪』の影響をめぐって
　第一節　同類の古小説との影響関係について
　　一・一　南朝の宋・劉義慶『世説新語』との比較
　　一・一・一　『談藪』と『世説新語』の共通点
　　一・一・一・一　『談藪』と『世説新語』の文学的特徴における共通点について
　　a、二者とも同じジャンルの古小説であることについて
　　b、二つの著書とも実在していた人物の文学作品であることについて
　　一・一・一・二　『談藪』と『世説新語』の言語的特徴における共通点について
　　a、二つの著書の「叙事表現」と「対話表現」について
　　b、二つの著書の「対話表現」における機智について
　　一・一・二　『談藪』と『世説新語』との相違点
　　一・一・二・一　『談藪』と『世説新語』の内容上の違い
　　a、『談藪』には「志人」の話も「志怪」の話もあることについて
　　b、『談藪』には帝王が批判、否定的対象となっていることについて
　　c、『談藪』には女性の話を題材として取り上げたものがないことについて
　　一・一・二・二　『世説新語』と『談藪』の登場人物の行為の相違について
　　a、「清談」という行為について
　　b、「服薬」という行為について
　　c、「飲酒」という行為について
　　d、「隠逸」という行為について
　　一・二　北宋・宋庠の『楊公談苑』（原名『南陽談藪』）について
　　一・二・一　北宋・宋庠の『楊公談苑』（原名『南陽談藪』）と隋・陽玠松の『談藪』とのつながりについて
　　一・二・二　北宋・宋庠の『楊公談苑』と隋・陽玠松の『談藪』との共通点について
　　一・三　南宋・彦直英の『談藪』について
　　一・三・一　南宋の『談藪』撰者と作品内容について
　　一・三・二　南宋の『談藪』における文人逸事との比較について
　　一・四　他の小説集の引用について
　第二節　詩集注、詩話、字典、辞典への引用について
　　二・一　詩集注、詩話に引用されたものについて
　　二・二　字典、辞典に引用されたものについて
　　二・三　『漢語大詞典』における『談藪』の話の引用の問題点について
第四章　『談藪』のジャンル、文学的特徴および小説史上の位置
　第一節　『談藪』のジャンルについて
　　一・一　中国古小説の系統について
　　一・二　志人小説の概念
　　一・三　歴史から文学への変容―志人小説
　　一・四　『談藪』の資料の来源について
　第二節　『談藪』の文学的特徴について
　　二・一　「会話」を主となし、「叙述」を補となす
　　二・一・一　会話で人物像を描く
　　二・一・二　『談藪』の逸文における「会話」「行為」による人物の神韻の描写について
　　二・二　『談藪』における「短篇化」と言語の「洗練さ」
　　二・三　『談藪』における南北朝の詩に関して
　第三節　『談藪』についての結論と小説史上の位置
　　三・一　『談藪』についての結論
　　三・二　中国志人小説史上隋代の空白および『談藪』の位置

第五部　訳注篇

第二章　『談藪』の成書と散逸年代についての考察
第一節　成書年代について
第二節　散逸年代について
第三部　比較篇
第一章　『談藪』と正史の伝記における同一内容の記載の比較について
第一節　『談藪』の逸文と正史の伝記における同一内容の記載のある六四条について
一・一　六四条の逸文の共通点
一・二　六四条の逸文の相違点
（1）「三書」との比較
（2）「五代史」「両史」との比較
第二節　『談藪』の逸文の内容が正史の伝記には見当たらない四二条の逸文に登場する人物について
二・一　正史に伝記のある人物について
二・二　正史に伝記がない人物について
第二章　『談藪』の逸文と正史の伝記における同一内容の記載との関係について
第一節　『談藪』の逸文内容と「三書」「五代史」「両史」との関係について
一・一　「三書」との関係
一・二　「五代史」との関係
一・三　「両史」との関係
第二節　正史の伝記における小説の取り入れについて
第四部　総論篇
『談藪』の撰者をめぐって
『談藪』の創作動機
第一章　散逸古小説『談藪』の逸文の主な内容について
第一節　『談藪』の逸文の主な内容について
一・一　〈詼諧〉類の逸文の例
一・二　〈俊辯〉類の逸文の例
第二節　『談藪』の逸文における思想
二・一　儒教道教思想について
二・二　仏教思想について
二・三　儒道仏三教融合について
第二章　『談藪』の人物群像と言語的特徴について
第一節　登場人物の人物像
一・一　登場人物の形象について
一・一・一　「帝王類」の人物像について
一・一・二　「中央官僚類」の人物像について
一・一・三　「地方官僚類」
一・二　人物と談話について
一・二・一　「対話型」について
一・二・二　「独白型」について
一・三　人物と描写について
一・三・一　風貌描写
一・三・二　風景描写
一・三・三　行為描写
第二節　表現の言語的特徴
二・一　平仄について
a、「清談」という行為について
b、「服薬」という行為について
c、「飲酒」という行為について
d、「隠逸」という行為について
一・二　北宋・宋庠の『楊公談苑』（原名『南陽談藪』）について
一・二・一　北宋・宋庠の『楊公談苑』（原名『南陽談藪』）と隋・陽玠松の『談藪』とのつながりについて
一・二・二　北宋・宋庠の『楊公談苑』と隋・陽玠松の『談藪』との共通点について
一・三　南宋・彪元英の『談藪』について
一・三・一　南宋の『談藪』撰者と作品内容について
一・三・二　南宋の『談藪』における文人逸事との比較について
一・四　他の小説集の引用について
第三節　詩集注、詩話、字典、辞典への引用について
二・一　詩集注、詩話に引用されたものについて
二・二　字典、辞典に引用されたものについて
二・三　『漢語大詞典』における『談藪』の話の引用の問題点について
第四章　『談藪』のジャンル、文学的特徴および小説史上の位置
第一節　『談藪』のジャンルについて
一・一　中国古小説の系統について
一・二　志人小説の概念
一・三　歴史から文学への変容―志人小説
一・四　『談藪』の資料の来源について
第二節　『談藪』の文学的特徴について
二・一　「会話」を主となし、「叙述」を補となす
二・一・一　会話で人物像を描く
二・一・二　『談藪』の逸文における「会話」「行為」による人物の神韻の描写について
二・二　『談藪』における「短篇化」と言語の「洗練さ」
二・三　『談藪』における南北朝の詩に関して
第三節　『談藪』についての結論と小説史上の位置
三・一　『談藪』についての結論
三・二　中国志人小説史上隋代の空白および『談藪』の位置
第五部　訳注篇
『談藪』逸文一〇六条総目録
『談藪』逸文（No.1～No.106）の原文、訳文、注釈
附録
附録一（No.1～No.7）の原文、訳文、注釈
附録二（No.1～No.4）の原文、訳文、注釈
後　記
参考文献
一、参考文献（中国）
二、参考文献（日本）
中文摘要
人名索引

登場人物の条数南北比較

三国魏：一条
北魏：一四条　南朝宋：一三条
北斉：二二条　南斉：三一条
北周：一条　梁：一五条
隋：七条　陳：二条

『談藪』逸文内容分類

◎著者紹介

何　旭（He Xu）
1961年、黒龍江省に生まれる。暨南大學修了、東京大学大学院人文社会科研究生、大東文化大学大学院文学研究科博士課程後期修了〔博士（中国学）〕
大東文化大学、清泉女子大学等非常勤講師。

論文　「『談藪』の研究―資料篇」（大東文化大学『中國學論集』14号 1997年）、「華人社區漢語共同的語彙差異及其成因」（『中山大學學報論叢』第23巻 第4期 2003年）、「『談藪』の研究―書名と撰者についての考察を中心として」（大東文化大学『中國學論集』23号 2006年）、「日文中的漢字詞及其歷史層次性」（『暨南大學華文學院學報』第4期 2007年）、「『談藪』研究―作品の言語における特徴を中心として」（『武藏野美術大學研究紀要』第39号 2009年）、「散逸文言小説集『談藪』研究―『世説新語』との比較を中心として」（『清泉女子大學人文科學研究所紀要』第30号 2009年）。

訳書　「日本與韓國儒学研究的共同課題」（共訳、『學人』第8輯 江蘇文藝出版社 1995年）、上海辭書出版社『唐詩鑑賞辭典』訳注稿―李商隱篇―(5)（共訳、『大東文化大学紀要』第36号 1998年）、「美」（李祥文解説）（『中國美學範疇辭典』訳注 第2冊［共訳］大東文化大学人文科学研究所 2006年）。

No.3 王玄謨（『太平廣記』巻二一一　原闕出處、明鈔本所引『談藪』）

■原文

宋太原王玄謨、爽邁不群。北征失律、軍法當死、夢人謂之曰：「汝誦觀世音千遍、可得免禍。」謨曰：「命懸旦夕、千遍何可得？」乃授云：「觀世音、南無佛、與佛有因、與佛有緣、佛法相緣、常樂我淨。朝念觀世音、暮念觀世音。念念從心起、念佛不離心。」既而誦滿千遍。將就戮、將軍沈慶之諫、遂免。歴位尚書、金紫、豫州刺史。

■訳文

南朝の宋のとき、太原の王玄謨は、飛びぬけて颯爽としていた。その玄謨が北方を征伐に行き、戦いに敗れてしまった。軍法に従えば死刑になるところであったが、玄謨は夢の中である人に「あなたは観音経を千回読誦すれば、禍から免れることができます」と言われた。玄謨は「まもなく命がなくなるというのに、千回も唱えることなど、できるものか」と言ったが（それに対してその人は）玄謨に教えた。「観世音　南無佛　與佛有因　與佛有緣　佛法僧（相）緣　常樂我淨　朝念觀世音　暮念觀世音　念念從心起　念念不離心」と。玄謨は、このお念仏を千回まで読誦した。死罪になりそうになったそのとき、将軍の沈慶之の上奏によって死刑を免れることができた。玄謨の官位は、尚書、金紫、豫州刺史を歴任した。

■注釈

（1）宋　王朝

（2）太原　今の山西省太原市。

魯迅が日本に渡った一九〇二年、二二歳から二九歳までの期間は、豫才（魯迅のよびな）にとって知識人の生きるべき問題に決定的な方向を与えるものとなったことはよく知られている。それから八八年後の一九九〇年、著者は日本への留学を果たし、今日までの滞在に及んでいる。一人の中国文学を学ぶ学徒として、その研究の足場を日本の大学に求めたことの意義を時折考えなくもない。だが、同じく留日学生であった魯迅が残した研究を自分なりに深化させ、こうして完成させたことに深い感慨を感じると同時にひそかな満足感を覚えるのである。本書により、南北朝文人士大夫の群像をもとに、六朝時代の人々が織りなした中国の民族的特質の一端を明らかにして、今日に紹介することができれば著者としてこれにすぎるよろこびはない。（序文より）

既刊図書

中嶋幹起＝著
呉語の研究
―上海語を中心にして
〈文部省科学研究費補助金「研究成果刊行費」出版物〉
本書は、著者が、一九七八年以来、中国の呉語方言圏各地を踏査し、採集した口語資料をもとに、当該方言の音韻と語彙の整理・分析を行い、中国語学研究のひとつの成果として公刊されたものである。
◉B5判・上製・函入・752頁
◉'83年2月刊
◉本体価格25、000円＋税　ISBN978-4-8350-4387-1

中嶋幹起＝編／今井健二・高橋まり代＝協力
清代中国語　満洲語辞典
清代に編纂された『御製増訂清文鑑』（全三二巻＋補編四巻）をコンピューター処理し、「現代中国語索引」と「満洲語索引」を付す。満洲語学、中国語学、東洋史学の基本工具。
◉B5判・上製・函入・2、168頁
◉'99年5月刊
◉本体価格38、000円＋税

野中正孝＝編・著
東京外国語学校史
―外国語を学んだ人たち
「東京外国語学校」（現・東京外国語大学）の知られざる実像、近代日本の国際化を担ったその出身者たちの忘れられた活動の軌跡を、残された関係資料を克明に調査し精細に明す大著。
◉推薦＝寺崎昌男
◉A5判・上製・函入・1、620頁
◉'08年11月刊
◉本体価格9、800円＋税　ISBN978-4-8350-5767-5

李　紅衛＝著
清水安三と北京崇貞学園
―近代における日中教育文化交流史の一断面
戦前、宣教師として中国に渡り、「崇貞学園」を創設した清水安三（桜美林大学創設者）の諸活動と思想形成を、档案館等の新資料や卒業生からの聞き取りをもとに解明。
◉推薦＝阿部　洋・樽松かほる
◉A5判・上製・348頁
◉'09年2月刊
◉本体価格4、800円＋税　ISBN978-4-8350-6196-2

六角恒廣＝著
中国語関係書目〔増補版〕
明治以降の近代日本における中国語教育に使用された教科書を全て収録。旧版（一八六七～一九四五）につづき、増補版では、二〇〇〇年までを発行年月日の順に配列している。
◉A5判・並製・181頁
◉'01年12月刊
◉本体価格2、000円＋税　ISBN978-4-8350-4394-4

波多野太郎＝著
波多野太郎博士　覆印語文資料提要
中国語及び文学に関する資料収集についての第一人者・波多野太郎博士編纂の『中国語学資料叢刊』『中国文学語学資料集成』『中国語文資料彙刊』等に収載の全文献の解題と索引。
◉B5判・並製・382頁
◉'96年2月刊
◉本体価格5、000円＋税　ISBN978-4-8350-4382-0

●表示価格はすべて税別。

不二出版
〒113・0023
東京都文京区向丘1・2・12
電話03・3812・4433
ファクシミリ03・3812・4464
振替00160・2・94084

2010/3